



2025年（令和7年）

11月号（No. 966）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

HISTORY EXPLORATION

日光連山に残る円空の
厳しい入峰修行の足跡をたどる

東海支部 清水克宏

円空、関東に向かう

円空は、寛文12年から延宝3年（1672～75年）ごろに及ぶ大峯山中での厳しい修行を経て、自らの命を護法（仏法を守護すること）に捧げる決意のもと、尾張国や美濃国を遊行しながら爆発的な造像活動を行います。何ものにもとらわれない力強さや、心に染み入るような微笑みをたたえた名作が、この時期に数多く造られました。

そして、延宝7（1679）年7月5日には、天台宗寺門派の総本

山である園城寺（通称・三井寺）で正式に受戒し、尊栄僧正から『佛性常住金剛寶戒相承血脈』を承けています。寺門派の園城寺は、顕教（法華経を根本仏典とする天台法華の教え）、密教に加え、修験道の3つの教えを兼ね備えているとされ、天台宗系修験である本山派の本山・聖護院も寺門派に属していました。そして、「修験者としての山岳修行を積み、諸国を遊行しながら造像し祈禱する天台宗の僧」として、関東に向け旅立ちます。このとき円空は、すでに50歳になる

目次

日光連山に残る円空の厳しい 入峰修行の足跡をたどる	1
チョゴルンマ氷河を進み スパンティーク登頂を試みる	4
2025年度自然保護全国集会を 妙高高原メッセと笹ヶ峰で開催	6
「私のパミール・残された高峰」 角張嘉孝氏の講演会を開催	8
写真家・小松由佳さんの原点と 新刊『シリアの家族』	9
山の名著再読	10
東西南北	12
活動報告	13
図書紹介	14
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室
*開室日の電話受付時間 10時～16時

うとしていました。

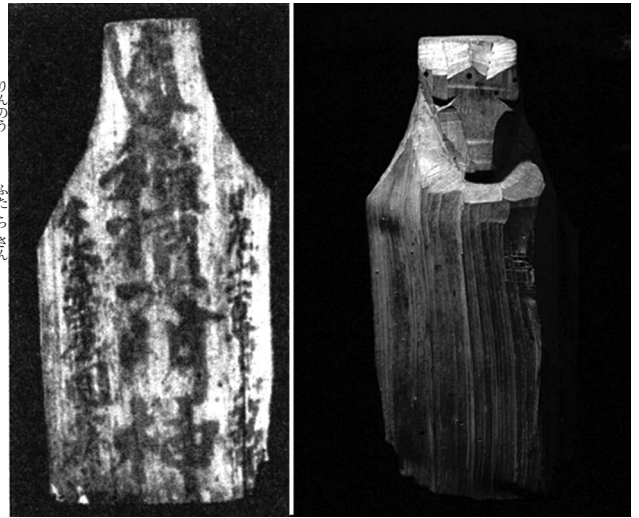
関東で円空の像が最も多く残るのは、武蔵国だった埼玉県で、170体余りの像が確認されています。円空は、同国の本山派修験の中心寺院であった不動院（廃絶）において本尊不動三尊像を造顕しており、残された像の約半数が、その末寺などに伝わった由来を持ちます。

その他の関東の像は、群馬県が17体、栃木県が16体、茨城県が3体にとどまりますが、像の所在地や背銘、残された和歌などから、筑波山や赤城山、榛名山、妙義山、日光などの山々で修行をしたことが分かります。中でも日光周辺に伝わる像は、円空の厳しい山岳修行をしのばせ、特筆されるべきものです。

円空当時の日光はどのような場所
だったのか

日光市所野の滝尾神社の稲荷大明神立像には、「日光山一百廿日山籠／稲荷大明神／金峯笹窟圓空作之」と記されており、円空が日光山中で120日にも及ぶ山籠修行をしたことがうかがわれます（画像1）。また、鹿沼市廣濟寺に伝わる、日光中禅寺の本尊である立木観音を模した千手観音菩薩立像には、「傳燈沙門高岳法師／天和二戊九月九日圓空刻之」と背中に墨書されており、天和2（1682）年9月に、日光山輪王寺光樹院の住職であった高岳のために造像していることが分かります。

日光には、二つの顔があります。一つは、徳川家康を神格化した東照大権現を主祭神として祀る東照



画像1 所野滝尾神社蔵(日光市歴史民俗資料館寄託)稲荷大明神立像
出典:『微笑みに込められた祈り 円空・木喰展』(2015年)図録

としてのものです。男体山はかつて二荒山と呼ばれ、観音菩薩の降り立つとされる伝説の山・補陀落山と重ね合わせて信仰されてきました。日光とは、二荒が転化したものと言われます。

勝道は修行の場を求め大谷川を遡行し、天平神護2(766)年、その北岸に紫雲立寺を建て、翌神護景雲元(767)年に、のちに二荒山神社となる祠を建て、この地を拠点に二荒山登頂を目指します。しかし、雪深く峻険で、荒天にも見舞われ二度失敗、天応2(782)年3月、命を捨てる覚悟でようやく15年越しで登頂に成功し、中禅寺湖畔に中禅寺の前身となる神宮寺を建てます。

以後、日光山は山岳霊場として信仰を集め、特に中世から戦国時代にかけては修験が勢力を持ち、最盛期には三百余坊を数えたと言います。しかし、天正18(1590)年に豊臣秀吉が小田原北条氏

を下した小田原合戦において、僧徒が北条氏側に加担したため秀吉の怒りに触れ、日光山はいったん衰微し、修験の伝統も途絶えしました。これを再興したのも天海です。東照宮などきらびやかな堂宇の建ち並ぶ二社一寺と、古くからの閑東きつての修験の霊地、この対照的な側面を持つ日光で、円空はどのような修行をしたのでしょうか。

「日光山二百廿日籠」

日光山の山岳修行は、勝道に始まるとされますが、鎌倉時代に將軍源実朝の信任を得て日光山別当についた辨覚により熊野修験の影響を受けながら大成されました。辨覚は実朝の遺志を継ぎ大峯竺の窟の本尊である銅造の不動明王立像を奉納しています。竺ノ窟は円空も修行した場所で、滝尾神社の稲荷大明神立像に、「金峯竺窟圓空作之」と墨書しているのは、このような所縁を意識しているのものです。

そして、室町時代末までに修験者による冬峰・華供峰・補陀落夏峰・惣禅頂と呼ばれる冬春夏秋4つの入峰修行、総称して「三峰五禅頂」が完成しました。修験者は山伏

とも呼ばれますが、これは山に伏し抖擻(心身を浄化し、雑念を払い、心を集中する行)する者という意味があり、命懸けの厳しい修行がうかがわれます。

このうち、冬峰は12月から3月の約80日間、日光山から南側の山々を周回するものです(図1)。春の華供峰は、3月から4月の約50日間で、冬峰と同じルートをたどった後、いったん中禅寺湖畔に出てから山を下ります。秋8月に行なわれる惣禅頂は、男体山・女峰山・小真名子山・大真名子山・太郎山など北側の山々を約10日間で巡ります。そして、補陀落夏峰は5月から7月までの約62日間で日光連山全体、つまり冬峰と惣禅頂のコースを含み、さらに西の日光白根山まで足を延ばす最も厳しく長大なものでした(図1)。

江戸時代に入り天海によって修験が再興され、入峰修行も復活しましたが、この補陀落夏峰だけは、復活することはありませんでした。犠牲者が多かったことなどもあったでしょうが、天海によって復活した修験は、本来の抖擻性を失ったもので、東照宮を権威つける日光山の行事の一部に組み込まれて

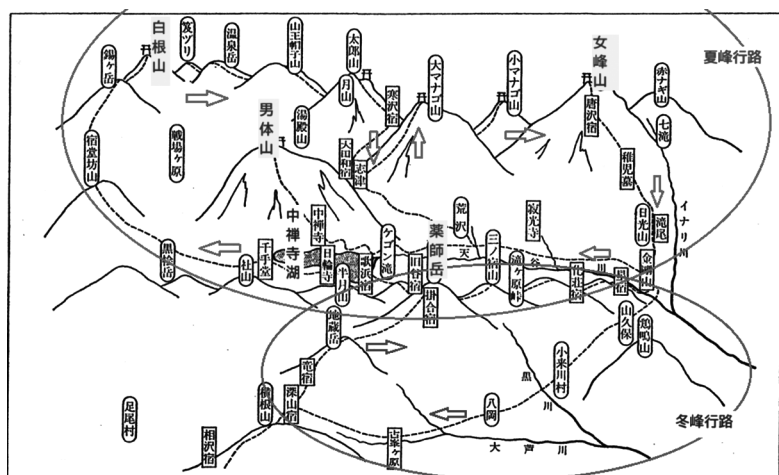


図1 日光山概念図と修行道 出典:宮田登・宮本袈裟雄編『日光山と関東の修験道』(1979年)に加筆

しまったことが、最大の理由と考
えられます。

円空が行なった「日光山一百廿
日山籠」すなわち120日にも及
ぶ山籠修行とはどのようなものか
調べていくと、前述の高岳との関
わりに鍵がありそうなが分かつ
てきました。輪王寺光樹院の住
職だった高岳は、のちに大僧都と
なった日光山内の重鎮で、元禄7

(1694)年には、男体山の登拝口である中禪寺の上人に任じられていますから、山岳修行も相当重ねていたと推測されます。円空は山籠修行の後と考えられる天和2(1682)年9月に、高岳から密教の秘法を数々伝授されており、高岳自筆の伝授書が岐阜県郡上市の星宮神社に伝わります。

さらに興味深いのは、最近、高

岳が自作した十一面觀音立像が、輪王寺で発見されたことです。像内の「奉供養 十一面觀自在尊法華經讀誦爲慈母妙性菩提而已 元禄六西八月廿九日傳燈大僧都高岳」という墨書から、高岳が元禄6（1693）年に、亡き母の菩提を弔うために造った像であることが判明しました。円空が中觀音堂で造願した十一面觀音像と像容が似るばかりか像内納入品を納めていること、そして、造像の背景に法華經の女人成仏の思想があることが共通します。このことから、円空が造像し、高岳が秘伝

を教えるだけにとどまらず、ふたりは信仰の根源で深い信頼関係を築いていたことがしのべれます。

円空は、星宮神社に残した祭文「かいがわめえんぎんぎだに彌川鰐縁起神祇大事」に、
風和讃「かいはわめえんぎんぎだに彌川鰐縁起神祇大事」に、
登ったと考えられる関東の山々を
詠み込んでいますが、日光につい
ては、男体山ではなく「白根嶽形
見」と、日光白根山を詠んでいま
す。同山は、慶安2（1649）年
に有史以来の噴火で新火口が形成
されており、噴火間もない蝦夷の
うす有珠山や内浦岳（北海道駒ヶ岳）に
登っている円空は、強く惹かれた
ことでしょう。

さらに、長大な夏峰のルートも関東から帰還後、地理的に空白地帯であった飛驒山脈南部の高峰に単独登頂していった円空ならたどれたはずです。当時廃絶されて久しい補陀落夏峰のうち、少なくとも日光白根山を含む主要部分を踏破したのではないでしょう。だからこそ、高岳は円空に敬意を表し、深い関わりを築けたと思われずにはないのです。

この9月、円空をしのんで補陀落夏峯ルートのうち、宿堂坊山から錫ヶ岳を経て日光白根山に至る稜線をたどってみました。現在も



画像2 笹に覆われた補陀落夏峰ルートを行く。左が日光白根山、右が男体山。錫ヶ岳から日光白根山に向かう稜線にて

登山道がなく、踏み跡がヤブに埋もれる稜線の西には火山の力を見せつける日光白根山、東には観音の補陀落淨土を思わせる男体山と中禅寺湖が展開し、円空の信仰風景を目の当たりにした思いがしました。

【参考文献】宮田 登・宮本袈裟雄
編『日光山と関東の修験道』（1979年、春秋社）

宮家準著『修験道組織の研究』
(1999年、春秋社)

池田正夫著『日光修験三峯五禪頂の道』（2009年、随想舎）

【注意】画像の無断転載を禁止します。

創立20周年記念事業

グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅦ(下)

チヨゴルンマ氷河を進み スパンティーク登頂を試みる

中谷康司

GHTステージⅦの後半日程で、中谷康司・みどりの2隊員はスパンティーク峰(7027m)の登山を実施した。この山は、ちょうど本隊が進むビアフォ・ヒスパール氷河の南面を走るスパンティーク・ソスブン山脈の中央部に位置する。我々はちょうど本隊と山脈を挟んで反対側を併進する形でチヨゴルンマ氷河を進み、南東稜からの登頂を目指した。



チヨゴルンマ氷河の奥にそびえるスパンティーク

スパンティークは1992年、主に高校教諭で構成された広島三朗隊長率いる神奈川ヒマラヤ登山隊が16人全員登頂を果たしたことで知られる。その後も多くの日本隊が南東稜から登頂し、比較的内容なピークとして日本人にも馴染みが深い。直近では、2024年に日本人の登山家3名が相次いで命を落とし、ニュースとなった。

今回は隊員が少ないこと、日程が短いこと、また、我々の実力と前年の事故も鑑みてハイポーター(HAP)2名を伴う登山とした。

チヨゴルンマ氷河をBCへ

7月16日…スカルドゥーアランドゥ(2740m)

本隊や帰国組に見送られ、1日早く出発。荒れた道をジープで登山開始の村アランドゥまで行く。

17日…アランドゥーマンプクル(3320m)

曇ときどき雨と天気は優れない

が、お昼過ぎにはキャンプ地へ到着。夜、徐々に天気が回復し、谷奥にスパンティークが見えていることに気が付き、気分が上がる。

18日…マンプクルーボロチョ(3800m)

快晴。スパンティークを見ながら快適なキャラバン。この日も順調にキャンプに到着。

19日…ボロチョースパンティークBC(4300m)

大雨から一転快晴。本日は氷河に入る。HAPの的確な案内で、ほとんど危険な場所を通らずBC直下に到達することができた。BC直下は絶壁になっており、一見登れるようには見えないが、その中を縫うように道がついている。現在、この尾根末端的岩壁を登り切った4300mの高台にBCを設けるが、2000年初めまでは尾根の東面、バズイン氷河にBCを置き、南東稜の側壁を登って稜上へ到達する、異なるルートをとっていた。BCは見晴らしが良く、これまで歩いてきた氷河を見渡すことができた。

20日…BCステイ

荷揚げ準備、フィックス練習、昨年この山で亡くなった立正大学山

岳部OBで国際山岳ガイドの平岡竜石さんと、我々も親交のあった田口篤志さんの慰霊祭を行なった。今回のHAPは昨年の捜索隊の一員で、ほかのスタッフとともにお花を集めて一緒に慰霊祭を行なってくれた。

21日…BC→C1(5100m)→BC

C1への荷揚げ。前半のバルトロ・トレッキングのお陰で、60ℓザック一杯の荷を担いでも苦にならなかった。

22日…BCステイ

残りの荷が少ないので隊員はレスト、HAPのみ荷揚げ。

23日…BC→C1

雨交じりの中、高所順応のためにC1へ上がり1泊。

24日…C1→BC

悪天予報のため隊員はBCへ戻り、HAPのみC2への荷揚げ。隊員のBC帰着直後から降雨、一日中大雨で、C2では大雪となる。

25日…BC→C1

C2進攻に備え、ときおり雨の降る中、隊員もC1へ移動。夜は雪になった。

26日…C1ステイ

霧に包まれ全く視界が利かず、

HAPの1人が雪目の症状を訴えるためC1停滞。

27日…C1～C2(5530m)

霧交じりの曇なもの、昨日よりは視界が利くためC2へ向かう。所々にある隠れたクレバスを縫うようにしてC2へたどり着く。

28日…C2ステイ

早朝の悪天でフィックス作業が危ぶまれたが、この日、HAPがC2～C3間のフィックス準備を終了。

アタック延期で命拾い

29日…C2～C3(6050m)

昨年の事故現場を含む極細のリッジを抜け、標高差500m近い



天気の優れないなか、C1～C2間のリッジを行く

急斜面をフィックス・ロープを頼りに一直線に登る。最大傾斜は40度を超えており、きつい。6050mのC3(下部)をキャンプ地とした。夜は星空であったが、InReachの天気予報が不安定なのでアタックを延期する。

30日…C3ステイ

アタック延期を決めた数時間後には一転吹雪となり、その後、丸一日猛吹雪となった。停滞して命拾いした。

31日…C3～C2～C1～BC

早朝まで続いた暴風雪がやみ、所々青空も見えるようになった。しかし、InReachの天気予報が不安定なため、重廣隊長に詳細な天



スノードーム(トンガリ)に続く急斜面。左肩がC3

気予報を送っていただいた。結果、長時間のアタックに耐え得る日が下山期限までにはないことが判明。これ以上降られる前に安全に降りることを決めた。再び視界が利かなくなる中、懸垂下降を繰り返し、クレバス帯、極細リッジを通過、この日なんとかBCまで降り切る。

8月1日…BCステイ

夜中から早朝は再び暴風雨。しかし、朝には快晴となった。片付け日和の晴天の下、キャラバンに向けて装備の整理。

2日…スパンティークBC～チヨブラングサ(2700m)

この日も雨。帰りの案内役が氷河で迷い、巨大迷路を彷徨うことになる。底の見えないクレバスを何度も越え、昇り降りを繰り返し、雨による洪水によって各所で地形が変わり、道もなくなっていた。隊員のキャンプ地到着も19…45となり、最後のポーターに至っては23…45の到着となった。

3日…チヨブラングサ～アランドウ・スカルドゥ

快晴の下、最後のバックキャラバン。この日まで上部で粘れる日程があればアタックできたかもしれ

れないな、などという想いもあったが、とにかく最後なので気持ち良く歩いた。アランドウの村は麦の収穫を迎えて黄金色に輝き、大変美しかった。そんな村を後にし、あちこち水が溢れて、来るときには様相が変わった道を延々ジープに揺られながらスカルドゥに戻って、我々の登山は終わった。

行ける場所としてのヒマラヤ

悪天が続き、登頂できなかったことは非常に残念であった。しかし、社会人になってから本会で山を始め、いつかヒマラヤに行つてみたいと思っていた2人の隊員にとっては、大変貴重な体験となった。GHTステージVIIの隊員の多くが、小さなチャンスを活かして今回、新たにヒマラヤの地へ足を踏み出した。

重廣隊長を通じてヒマラヤ登山の歴史を学び、そしてまた「行ける場所としてのヒマラヤ」を生で体感できたことは、私たちにとって非常に大きなことであったと思う。このようにして時かれた種は、きっとこれからの本会の、さらなる活動へと成長していくのではないだろうか。

REPORT

2025年度自然保護全国集会を 妙高高原メッセと笹ヶ峰で開催

自然保護委員会委員長 下野綾子

一般市民を含め207名が参加

今年度の自然保護全国集会は越後支部と連携し、10月18日(土)・19日(日)に新潟県妙高市で行なった。1日目の講演会は、妙高市が共催となり、公益社団法人日本山岳会・自然保護委員会60周年記念／妙高市制施行20周年記念／妙高戸隠連山国立公園指定10周年記念として、一般市民にも広く参加を呼び掛けた。その結果、日本山岳会会員65名、一般来場者数136名、妙高市職員6名の計207名が参加した。

橋本しをり会長の開会挨拶では、「思考は地球規模で、行動は身近から」という自然保護委員会の Motto が紹介され、登山者にとって身近なところから調べ、考え、行動していくことの大切さが述べられた。

次に妙高市長の城戸陽二氏から妙高市におけるライチョウ保全活動の取り組みをご紹介いただいた。

2015年度からライチョウの生息調査を開始し、翌年「生命地域妙高環境会議」を設立した。18年度からはクラウド・ファンディングを開始し、20年度からは登山者に入域料を求め、その収益をライチョウ保全活動や登山道沿線の植生回復などに充てている。このほかに

もボランティアと連携し、ライチョウの餌植物と競合して増加傾向にあるイネ科植物の除去や外来植物駆除、登山道整備、携帯トイレ利用の推進などを進めている。最後に城戸市長は、妙高市は自然とともに発展してきた地域であり、今後市民と協力しながら山岳環境の保全を継続していく、と締めくくられた。

次に越後支部自然保護委員長の春日良樹氏より越後支部の保全活動について、新潟県・弥彦山での外来種除去活動などが紹介された。高齢化が進むなかで手作業での除去は労力を要するが、登山者自身が持ち込んだ外来種として責任を

自覚し、次世代に良好な自然環境を引き継ぐためにも、今後も粘り強い駆除活動の継続が必要である、と呼び掛けた。

2名の講師が基調講演

次に2名の講師から基調講演をいただいた。まず長野県環境保全研究所の技師である小林 篤氏から、日本におけるライチョウの現状と頸城山系におけるライチョウ保全活動に関する講演をいただいた。ライチョウは世界的には北半球の寒冷地に分布し、日本は最南端の孤立した生息地である。日本の個体群は、過去の氷期・間氷期における環境変化の中で高山帯に取り残され、山頂付近でのみ生き残っている。日本の高山帯はハイマツ帯が広がり、ライチョウはその茂みに巣を作って捕食者から身を守る。ハイマツの存在が、苛酷な環境下でライチョウが生き延びる上で重要な要素となっている。ライチョウは日本の文化とも深く結びついており、鎌倉時代の和歌にも詠ま



大勢の参加者で埋まった妙高高原メッセ会場

れ、山岳信仰の中では神の使いとして尊ばれてきた。

そのライチョウの個体数は1980年代に約3000羽と推定されていたが、2000年代には約1700羽にまで減少した。温暖化に伴う乾燥化が進行している火打山では、多くのボランティアによってライチョウの生息環境を維持するための活動が行なわれている。また、YAMAPと連携して登山者の投稿したライチョウ写真を活用した生息域の調査も行なわ



各支部や団体の保全活動紹介ポスターを展示

れている。小林氏は、登山者がスマホを通じて保全活動に貢献できると強調し、写真を投稿して協力してほしいと呼び掛けた。

次に山と溪谷社の取締役である萩原浩司氏から新潟の山々の自然や山岳環境の変化に関する話題提供をいただいた。日本には約1万8000の山があり、新潟県は965座で全国2位を誇る。最高峰は小蓮華山(2766m)、県内のみの最高峰は火打山(2462)で、妙高山や高妻山など9つの百名山がある。山の多さと地形の多様性

が新潟の自然を特徴づけている。

次いで2022年6月に俳優・

組の撮影エピソードが紹介された。笹ヶ峰から登った妙高・火打山では、初夏の花々や残雪のコントラストが美しく、凍結した高谷池やガスに包まれた山頂など、厳しく

も魅力的な山の情景が語られた。

最後に、登山者の視点から見た自然環境の変化が報告された。コエゾゼミやミンミンゼミの高標高地への進出は、温暖化の影響と考えられる。ヨーロッパ・アルプスでは氷河の著しい後退が観察され、国内の伊吹山ではシカの食圧による植生破壊と土壌崩落が深刻化している。講演は、「登山者自身が自然の変化に気づき、原因を考え、研究者や行政と連携して行動することが大切だ」という呼び掛けで締めくくられた。

日本山岳会からの情報発信として、各支部や団体の保全活動を紹介する冊子を参加者に配布するとともに、ポスター掲示を行なった。北海道支部・宮城支部・群馬支部・東京多摩支部・越後支部・山梨支部・信濃支部・静岡支部・東海支部・関西支部・広島支部・北九州支部・高尾の森づくりの会・本部自然保護委員会より活動報告が寄せられた。また、千葉支部からは

活動を記録した動画も紹介された。

2日目は笹ヶ峰散策と熊汁の昼食

翌日は日本山岳会会員55名が参加し、4班に分かれ、越後支部の方々に笹ヶ峰・夢見平遊歩道ショート・コースを案内していただいた。このコースは平坦で歩きやすく、紅葉で色づいた木々をゆつくりと楽しむことができた。また、昼食時には熊汁を振る舞っていたので、大変好評であった。

日本山岳会の自然保護委員会からは、中村みつをさんによるライチョウ・イラストを入れたエコバッグを参加者に配布した。妙高市からは妙高市制施行20周年記念品として、廃材を活用したコースターなどをご用意いただいた。また、味の素(株)からはアミノ酸を補給するアミノバイタルと睡眠ケアのサプリメント「ぶつすりグリーナ」をご提供いただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。本集会は、会員のみならず会員以外の多くの方々にも山岳保全の必要性を発信する貴重な機会となった。



2日目の笹ヶ峰散策参加者による記念写真

講師の先生からも登山者が保全活動に参加できることや登山者視点からの気づきの大切さが発信された。現在、山岳環境は大きく変化している。さらにこのまま温暖化が進めば、その変化は加速すると懸念されている。山のユーザーである登山者が連携し、山岳環境の保全に取り組む重要性が、今後さらに増すだろう。

来年度の集会は、静岡支部と連携して開催予定である。引き続き支部と協働して山岳環境の保全に努めていきたい。

REPORT

「私のパミール・残された高峰」
角張嘉孝氏の講演会を開催

高橋善護

グレイト・ヒマラヤ東端に位置するパミールは、コミニズム峰（現イスマイル・ソモニ峰）やレーニン峰（現アブアリ・イブニ峰などの7000m峰が有名ですが、6000m峰はあまりよく知られていません。この地域は古くからシルクロードが通り、玄奘三蔵やマルコ・ポーロも歩いたロマンあふれる歴史的な地でもあります。



ワハン回廊にそびえるマヤコフスキー峰(6095m)北面

パミール・中央アジア研究会（パ中研）は、2023年にタジキスタン・パミール踏査隊（高橋善護、本間正士、藤井正彦、金子浩、伊丹紹泰、藤大路美興）を派遣しました。全員、日本山岳会会員です。1991年、ソ連邦から独立した中央アジア5ヶ国のうちタジキスタンは、同時多発テロ事件の影響で危険地域として入城が危ぶまれていましたが、その後30年余り経過した現在、状況は大きく変化しています。パミール山中の各村にはゲストハウスができ、欧州から自転車愛好家による4000mの「聖地巡礼」の地となり、女性の単独旅にもたびたび出会うほどになりました。

タジキスタン・パミールは登山許可も不要で、日本人未踏の高峰や未踏の大岩壁も豊富です。自動車道も縦横に走り、そのポテンシャルはヒンズー・クシュ山脈にも匹敵すると思います。パ中研としてはこの地域の魅力を若い世代に

ぜひ知ってもらいたいと考え、日本山岳会学生部委員会とともに今回の講演会を企画しました。

講演者の角張嘉孝氏（パ中研会員、新潟大学山岳部OB、静岡大学名誉教授）は、ソ連邦時代からパミール登山の解禁に尽力し、1974年のレーニン峰遠征を導きました。現在はNPO法人・中央アジア森林草地保全研究所として2009年より「タジキスタンの森林と温暖化防止の研究」に取り組むかたわら、毎年のようにパミール各地の峰々を登り歩いてきた、タジキスタン・パミールの精通者です。

氏はワハン回廊にそびえるマヤコフスキー峰（6095m）登頂をはじめ、パミール中央部にある世界最長のフエドチェンコ氷河最奥のレボリューション峰（6940m）試登、フエドチェンコ氷河隣のグルム・グルジマイロ氷河踏査とレドヤナーヤ・ステナ峰（5610m）登頂、フエドチェンコ氷河の東入り口・タニマス川と西入り口・ヴァンチ川の偵察などのほか、5000m峰登頂や幾多の峠越えを行なっています。これらは氏の68歳以降の山行であり、驚きを禁

じ得ません。

講演会「私のパミール・残された高峰」（パミール・中央アジア研究会／日本山岳会学生部委員会…共催）は10月16日（木）の夜、日本山岳会本部104室で開催され、満席となる盛況でした。パ中研・本多海太郎会長と学生部委員会・武石浩明委員長の挨拶に続き、司会進行はパ中研副会長の私が務めました。

パミール全土に精通している氏の講演は豊富なスライドとともに淀みなく、学生部の参加は6名と少なめでしたが、熱心に質問が出され、氏も嬉々として対応。講演会後にはメール・アドレスの交換も行なわれ、交流が広がる良い機会となりました。まずまずの結果と言えるでしょう。今後、レボリューション峰、カールマルクス峰（6732m）、レッドピークガルモ峰（6602m）など、魅力的な高峰への関心が高まることが期待されます。

最後に、パ中研・藤大路美興理事の閉会挨拶をもって講演会は成功裏に終了しました。

（パミール・中央アジア研究会会員）

CHARACTER SKETCH

写真家・小松由佳さんの原点と
新刊『シリアの家族』

神長幹雄

今からちょうど3年前の2022年10月下旬、私はある書籍の取材で、写真家の小松由佳さんにインタビューしたことがある。本の一つのテーマは、登山家や冒険家たちが未知の世界に挑む際の転機についてで、登山家から写真家へと大きく方向転換した経緯を話してもらった。なにしろ学生時代から山岳部のリーダーとして登山漬けの毎日を送っていた彼女だ。その成果が2006年8月、世界第2の高峰K2に日本人女性として初めて南南東リブから登頂したことに表われていた。

その登頂後、8200mまで下った地点でビバークを強いられた。寒さと疲労と眠気で意識が朦朧とするなかで、「生きているか」と何度その後輩と声を掛け合ったという。そして数時間後、目に飛び込んできたものは一条の光だった。「地平線からポツンと一点、太陽の光が見えました。それが次第に大きくなつて一条の強い光線となつたのです。熱く感じられたほど、光の輝きが強かつたのを覚えています」

極寒の闇夜に耐えた後の、死の淵からの生還を確信できた瞬間だったのだ。

後日、小松さんはある想いを強くする。確かにあらゆる努力を積み重ねることが登頂に結びついていたのだが、なぜか割り切れなさも残っていた。自然という大きな流れのなかで、登頂は「運、不運」に左右される不確定な存在にすぎないという認識だった。

やがて彼女は長い旅に出る。中国からユーラシア大陸を西へ、最後に行き着いた先がシリアの中部、パルミラという周囲を砂漠に

囲まれたオアシスの一角だった。そこで暮らす60人の大家族に遭遇。相応の長い時間をかけて彼らの生活に接し、旅人には見えない豊かさを知る。砂漠の生活は、その文化も宗教も日本人には未知の要素が大きくて、興味をそそられるものばかりだった。

一方、シリアは40年にわたってアサド大統領父子による独裁政権が続き、内戦が勃発、解決の糸口すら見えない状況が続いていた。小松さんはそのシリアの大家族の下へ年に何回か通い、やがてその一家の12男、ラドワンと結婚、家族の一員を迎えられる。とともに難民たちの日常、特に女性や子どもたちの姿を写真で表現する道を選んでいた。

女性たちのたくましい暮らしぶり、激化する内戦と引き裂かれる砂漠の民の生活、そして急増する難民の数。内戦という非日常の世界にあつてなお日常の姿を取り戻すとき、彼らの心の動きをどう捉え、どう表現できるのか。彼らにカメラを向けるたびに、厳しい現実に打ちのめされたという。それでも写真は、内戦下の人々の生活や難民となつて異国で暮らす彼ら

の強く生きるたくましい姿を捉えていた。

そして、さらに歴史の大きな転機が訪れる。予想もしていなかったアサド政権の突然の崩壊だ。政権崩壊から8日後、小松さんは13年ぶりに祖国に立つ夫とともにシリアに入国する。難民となつてバラバラになつた大家族の行方、サイドナヤ刑務所の虐殺の痕跡、行方不明者のチラシが貼られた広場。波乱のシリアをひとりの人間として見詰め、記録に残してきた小松さん。その原点は、シリアの市井の人々への強い信頼感だという。

そして、その端緒になつたのが、窮地に立たされても決して諦めない「冒険家」の不屈の精神。あの一糸の光が、K2から見たあの光景が、かけがえのない大きな力となつたのだろう。

前作『人間の土地へ』（集英社インターナショナル、2020年）に続いて、11月下旬に上梓される『シリアの家族』。第23回開高健ノンフィクション賞を受賞した小松さんの新作をぜひ読んでほしい。

■小松由佳著『シリアの家族』（集英社刊、11月26日発売、定価2420円〔税込〕）



『シリアの家族』書影

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(53)『山岳省察』(今西錦司著・弘文堂書房)

斎藤清明

「私は今でも信じている。登山の正統派なるものは、初登山を求める人たちを措いてまたほかにない」

「私は初登山をもとめてきた。私は信ずるところを行えばよかった」

三高山岳部や京大旅行部を率いてアルピニズムの先頭に立ち、ヒマラヤ遠征を目指した今西錦司さん(1902〜92)が、30歳のとき記した「初登山に寄す」を冒頭に掲げた本書に、はるか後輩の私たちも刺激を受けました。

京都の弘文堂書房から1940(昭和15)年刊行。今西さんが30歳から38歳まで、30歳代に雑誌などに発表したものを集めた、山に関



昭和15(1940)年初版発行

する随筆集です。第一線で活躍してきた登山から探検へと踏み出したばかりでした。

表紙は山のデッサンをバックに力強く、「山岳省察」の4文字を2列に配し、口絵写真が4葉。樺太東北山脈の樹海、モンゴル草原を行く幌馬車、冬の白頭山遠征のポラーテント、そしてカラコルムの氷河。すでに踏査した地と、K2遠征を計画したものの行けなかった所(15年後に探検隊を率いて踏査します)。

内容は、山とスキー、ヒマラヤや白頭山遠征など先鋭的な論もあれば、「飛驒の四日」「北海道の冬を訪ねて」「山城三十山」「樺太の山の思い出」など山旅やワンダリング的なものもある。京都の北山の発見や中学生時代を回想する「北山・二つの登山発達史」は、ふるさと北山への讃歌。最終章の「回顧と展望」は、モンゴルの砂漠を望

遠鏡で飽くことなく眺めているところで終わる。「よし来年はどうあってもこの砂の海に乗り出さねばならぬ。砂漠の船―駱駝にのつて。これならば老兵にかつこうなスポーツじゃなからうか」。

冒頭の先鋭的な「初登山」と、ラストの砂漠のラクダの旅。今西さんにとっては、矛盾はしない。むしろ、このように展開することこそ、本領なのだろう。

今西さんは登山、さらに探検に熱中するとともに、生物学者として地道な調査研究を続けてきた。カゲロウ研究により37歳で理学博士になったとき、「登山家が博士に」と報じられ、何か意外なことのように受け取られたという。学者というより、登山家として知られていたのだ。学位をとった勢いで、今西さんは立て続けに2冊の本を著した。38歳にして最初の著作となった『山岳省察』と、翌年の『生物の世界』である。

『山岳省察』は寄稿した文章を集めたものだが、『生物の世界』は書き下ろし。『山岳省察』が凝った造本だったのに比べ、『生物の世界』は新書版で、ごく普通の装丁。口絵写真もなく地味な本だった。理

論的な内容で、「すみわけ」はじめ今西自然学の原典となる。

今西さんは少年時代から、山行記録など自らの山登りなどに関する文章を丹念に書いている。『山岳省察』の後、『草原行』(1947年)や『遊牧論そのほか』(48年)、随筆集として『山と探検』(50年)、『私の自然観』(66年)、『自然と山』(71年)など。また、『生物社会の論理』(49年)から晩年の『自然学の展開』(90年)に至る、理論的な多くの著作がある。それらは現在、全集や文庫、単行本で読むことができる。

しかし、30歳代以前に書かれたもの、学生アルピニストとして活躍した第一線の登山時代のものを含まれていない。そこで、中学時代の同人誌や三高山岳部ルーム日記、『三高山岳部報告』などから集めて、今西錦司「初登山―今西錦司初期山岳著作集」(斎藤清明編、1994年、ナカニシヤ出版)を編んだ。「初登山」としたのは、もちろん『山岳省察』の冒頭にある「初登山に寄す」に依ったものである。

文庫版は、講談社学術文庫(1977年初版)がある。

(京大学士山岳会会員)

『山の憶ひ出』上・下 (木暮理太郎著・龍星閣)

兄玉 茂

木暮理太郎のこの本を読んだのは中学生のころで、田部重治の『日本アルプスと秩父巡礼』を合わせた、日本山岳名著全集（あかね書房）だった。当時の私にとって日本アルプスは遙か遠い存在で、田部の「笛吹川を遡る」や、木暮の「秩父の奥山」を読んで感銘を受けていた。

高校生になって通う電車の中から、丹沢や奥多摩の山々を従えて雪をかぶって輝いている富士の姿を見るのを楽しみにしていた。この経験から見える山の特定に興味があり、「望岳都東京」を読み直し、山への憧れをこのような形でまとめている木暮理太郎という人に大いに興味を抱いた。

良く晴れた日には高台に上って双眼鏡を片手にスケッチをし、そ



昭和13 (1938)・14年初版発行

の山を特定するために、5万分の1の地形図を部屋いっぱいに広げて、山々が見渡せた地点に針を刺し、糸を引いてその山の位置を確認した。しかし、地図上に記載された山名はたして正しいのだろうか。なぜそのように呼ばれているのか気がかかってくるのだろう。正にここからが木暮らしいところで、古文獻を一つ一つ丹念に調べて、その背景まで知ることによってやく納得をするのだろう。ある山へ一つの登路から登っただけで何が分かるのか、ということである。例えば、「秩父の奥山」や「利根川水源地の山々」の厳密な記述がまさにそれであるし、「黒部川奥の山旅」のように子細を極め、場面ごとに正確無比に記述していく姿勢は、木暮以外には書きえないであろう。

上巻の序文で次のように述べている。
「所詮は、本を出す、否、世に生き残る本を出すといふことは、或る選ばれた人へのみ與へられた特権であるやうに思われる」と。それに対して藤島敏男、黒田孝雄、松方三郎ら若い世代の強い要望が以前からあって、龍星閣からようやく出版されることになった。
同じ装丁で上巻、下巻に分け、上巻は主に『山岳』に掲載された硬派の文章、下巻は登山の普及のために一般向きに書いた文章が多く収録されている。その中で下巻に収録されている「秩父宮殿下に侍して槍ヶ岳へ」と「朝香宮殿下に侍して南アルプスの旅」は、それぞれ『女性改造』、『中学生』という雑誌に発表されたもので、木暮の存在が登山界の第一人者として世間でも認められていたことを示すものであろう。

『山の憶ひ出』の数々の文章の中に「山の今昔」がある。当時、木暮は『山岳』の編集責任者でもあったので、時代の変化や登山の移り変わりにも敏感であった。この論考は昭和11(1936)年に共立社から刊行された『山岳講座』に収録されたものだが、おそらく日本で最初の日本登山史(概要ではあるが)を綴ったもので、ほかには誰も書ける人はいなかったのではなからうか。ここでは大昔の山と山人、山の信仰、宗教登山から、新しい時代のスキー登山のことや最先端を行く京大の白頭山遠征のことまでが述べられている。
そして、木暮理太郎と言えbaum一つ、ヒマラヤ登山研究の先駆者であったこともよく知られている。同じ『山岳講座』に掲載された「中央亜細亜の山と人」は貴重な文献として注目され、戦後間もなくの『山岳』第45年(1950年)にはその改訂版が掲載されており、日本人によるヒマラヤ研究は正にこれから始まったと言えよう。しかし、この論考は改稿中であつたこともあり、また、木暮の性格から『山の憶ひ出』には掲載できなかったようだ。
なお、古書では目にするのが少ない『山の憶ひ出』だが、2023年、ヤマケイ文庫クラシックスとして「紀行編」(税込み2420円)が出ていることを申し添えておく。

(早稲田大学山岳部OB)

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

明治43年小諸小学校編纂の『浅間山』——小島烏水の序文と茨木猪之吉の挿画——

小原 茂延

小島烏水が初めて高山と言える山に登ったのは浅間山であり、明治32年に竹馬の友であった久保天随と登っている。同35年に岡野金次郎と槍ヶ岳に登頂後、『文庫』に「鎗ヶ岳探検記」を連載し、『山水無盡蔵』に収めたが、その序文を島崎藤村に依頼している。そのことがあった故か、明治43年に小諸尋常高等小学校が出版を企画した『浅間山』の序文を藤村の推薦により烏水が書いている。茨木猪之吉が山王山の烏水宅を偶々訪れた日に、その序文が仕上がったと披露されて一読し、その文章のすばらしさに感嘆している。

その後、養親の許可を得て旅に出た茨木は小諸在の滋野に画友を

訪ねた折に、丸山晚霞から小諸小学校の図画教師を勧められた。教職などは不得手と思いつつも紹介状を携えて面接に臨み、翌日から勤めることになった。しかも折から編集中の『浅間山』の挿画や地図描きまで担当することになり、その奇縁に茨木自身驚いている。この間の経緯は、「大正八年記」として雑誌『山』（梓書房刊）の高原特集に茨木が「小諸時代」として振り返っている。当時、中村清太郎が白馬岳に向かう途次に立ち寄ったことや、若山牧水が小諸や上田などでの歌会に來た際に交流を持ったこと、気心が合った牧水の似顔絵などを添えている。

ここまでのあらましを日本山岳文化学会の文芸分科会小誌に紹介したところ、この秋口に越後支部の高辻謙輔会員から、『浅間山』を所蔵しており進呈如何」という旨のご連絡をいただき、全く吃驚

してしまった。よもや、この書籍が編纂元以外で所蔵する方がいるとは思われず、また、当時の書物といえは簡易な小冊子程度と考えてしまった小生は、送られて来た本が経年程度は当然ながら400ページ余りの立派な単行本であることにショックを受けてしまった。さすがに教育県として知られる長野だ、と感懷を深くした。

高辻会員とは、氏が「深田久弥山の文化館」で行なった講演を聴きに大聖寺に行った際にお目に掛かって以来、いろいろとご教示にあずかっていたものの、多年にわたる越後支部の図書委員長を歴任されていた（現在、図書委員会はないようであるが）だけに、求める書籍への目配りも違うものと感心した次第である。

さて、小島烏水による本書の序文であるが、アルプスやヒマラヤが未だ暗黒の地図であった時代、わが国ではすでに多くの高山が登られて記録がつくられていたこと、そして、日本の山は火山が多いことなどに始まり、上州の平原から峠に立ったとき、山岳国の第一山として浅間山が導師のごとくに立っていること述べ、烏水が山岳を好

むに至ったのも浅間山から始まったという。

また、山岳の表現において富士山をクラシカルな山とすれば、浅間は奔放自由のローマンチックの山であり、そこにこの山の生命が宿っている、と喝破する。一方で国史あれば郷土史ありて、信州小諸の人情にゆかしい味があると賛美し、この書が育英の事業に携わる人々の手によって成されたことの意義を讃えている。

本編は11編からなり、東信風景論から浅間山変異記、浅間神社考、地質および岩石、植物、動物並びに浅間登山（登山案内）、浅間余情、浅間性情論、拾遺雜篇と多岐にわたっている。

茨木猪之吉の挿画および地図は墨筆によるもので、浅間山を描いた挿画には「北上州鬼押出の遺跡」とあり、サインもそれまでの「不仙」からLIBARAKIとなったようである。

（資料映像委員会／埼玉支部）



活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

科学委員会

探索山行報告―箱根火山の活動史と今を知る

科学委員会主催の探索山行を10月20(月)～21(火)の2日間、箱根で開催した。参加者は科学委員14名、本会会員5名、一般3名の22名であった。2日間にわたり、講師の神奈川県温泉地学研究所の萬年一剛・研究課長から、専門的地質、火山関係について解説をいただいた。

【1日目】

秋雨前線南岸停滞の影響でぐずつきぎみの空模様の中、小田原駅を集合出発した。行く手の箱根方面は厚い雲に覆われ、金時山から箱根山地を俯瞰し、講師から箱根火山の成り立ちを聞くという企画は早々に諦めざるを得なかった。仙石原の「箱根湿生花園」での植物観察に変更した。広い園内の木道

の脇には、秋から初冬に花を付ける野草類がかなり残っていた。ちょうど見ごろを迎えたススキ原が園内外に広がり、箱根・仙石原の風情を存分に味わうことができた。

午後は早めに強羅の宿に着き、有形文化財に登録される伝統的木造建築の宿でゆったりと時を過ごした。食後のセミナーで、萬年講師から箱根火山群の成り立ちと2015年の箱根山噴火の経緯を聞いた。

また、大涌谷名物の黒たまごの生成要因について、従来の硫化鉄説に代わり、タンパク質の変性による有機物質で黒くなるという知見が紹介された。この現象は、一中学生の定説に対する疑問から真実解明に至ったとは驚きだ。

【2日目】

萬年講師同行でロープウェイ大涌谷駅下車。大涌谷の噴気孔群のある谷を臨む展望台は濃霧で視界

がない。「ここまで見えないのは初めてだ」と言う講師のもと、蒸気井温泉の仕組み、地滑り対策など大涌谷の火山活動について説明を受けた。その後「箱根ジオミュージアム」で火山と温泉に関する展示物の解説を受けた。なおここで、赤色立体地図の精緻な箱根全図展示を目にした。参加者皆、翌月の科学委員会主催のフォーラムでの発明者・千葉達朗氏の講演に大いに

関心が高まった。

最後は昨夜セミナーで講義を聞いた、黒たまごを加工する噴気孔湯だまりの見学である。火山活動で長らく閉鎖されていた大涌谷自然研究路の奥を目指す。全員ヘルメット着用で、講師と管理職員同行で研究路を15分ほど登る。たまたご池を見学し、すぐ近くの非常時用シェルター屋上で、相変わらずの霧の中、足元の火山地帯を想像

第41回図書交換会開催日および今後のスケジュールのお知らせ

図書委員会

8月号でお知らせした図書交換会は、来年(令和8年)3月7日(土)に、ルームにて13時より行なうことといたします。会員の皆様から多くの山岳書が寄せられましたことに、お礼申し上げます。現在そのデータ入力を行なっておりますが、今後のスケジュールなどにつき、お知らせいたします。

にはなかったことですが、デジタル版のみの会員には別途配信する予定です。HPにも掲載予定です。

○申込み締切りは1月末とし、開催当日来場された会員のお申込みと合わせ、複数申込みとなった図書は抽選で購入者を決定いたします。

○その他詳細も、会報12月号でお知らせいたします。

○会報12月号送付時に、申込み対象となる図書一覧リストを同封します。併せて申込み方法もお知らせします。昨年

○問合せ先Ⅱ図書委員 荒井 正人 ☎090・7719・7855
✉ masatonyama@gmail.com

しながらの聴講であった。

その後、計画では芦ノ湖西側の外輪山上の道路を箱根峠まで移動し、中央火口丘を観察する予定だったが濃霧のため取りやめた。芦ノ湖畔経由で「森のふれあい館」に立ち寄り、箱根の動植物の標本や生体展示などを見学し、出発地の小田原へ下りた。途中、萬年講師の「温泉地学研究所」を視察見学す

電子版会報「山」の

登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。発送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知（メール）や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。

不明な点は、デジタルメディア委員会(internet@jac.or.jp)にお問合せください。

【電子版への登録】1

<https://jacl.or.jp/kaiin/>

2025040135272.html



る計画だったが、諸事情でかなわす残念だった。あいにくの天候だったが、周りが真っ白で見えない分講師の話は耳に響き、新たな発

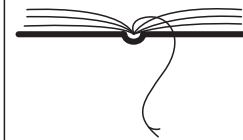
私、山小屋はじめます

小宮山花著



2025年5月 山と溪谷社 232頁
四六判 1800円＋税

図書紹介



見に出会った。心に残る箱根の秋日となった。

（木曾雅昭）

引継ぎから営業開始3年目まで、本人の筆による激動の4年間の記録である。

「日本百名山」の一峰、光岳。長野県と静岡県との県境にそびえるこの山は、日本百名山の中でもアクセスの困難で、静かな山として知られている。この山の山頂直下に、静岡県宮の山小屋「光小屋」がある。余談だが「静岡県宮」とはいうものの、実際の所在地は長野県である。本書は、32歳でこの小屋の管理人を引き継いだ女性、小宮山花氏の

光小屋を職場にすること、は、「片道9時間かかる職場」に就職するようなものである。というのは、この山の登山口があるのは長野県と静岡県の県境、遠山郷のさらに奥にある芝沢ゲート。ツアーバス以外に公共交通機関によるアクセス手段はないという、秘境中の秘境からスタートするしか到達するすべがない場所であるからだ。このような事情から、日本百名山の完全制覇を目指す登山者の中でもこの山が最後の一座になることが多いようで、光小屋でそのお祝いをする様子なども、文中で

紹介されているほどだ。

このような光小屋を小宮山氏が引き継いだのは2021年のこと。この年を「0年目」とし、22年（1年目）から24年（3年目）まで、それぞれの年ごとに章がまとめられている。小屋の管理に携わり始めてから、いくつもの壁を乗り越えながら経営が軌道に乗り、さらに良いものになるように女性らしいセンスを活かして工夫していった貴重な記録が記されている。

「0年目」の21年というところ、新型コロナウイルスの流行によるパンデミックに世界中が陥っており、とても山どころではなかったところである。光小屋も例外ではなく、休業を余儀なくされていた。管理人の引継ぎは、まさにそのような状況下で行なわれたのである。光小屋の管理人募集をしていたのは、光岳の静岡県側の山麓の川根本町役場。管理人引継ぎの物語の始まりは、これまでにいくつもの山小屋で働いてきた小宮山氏が20年4月に、この求人を見つけ、役場に問合せたところから始まる。

山小屋の管理を開始することになったのが、まだコロナ禍収束の気配がない2021年で、本書の

寄附金および助成金などの受入報告 (8月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
桐生 恒治 会員	50	委員会活動費として
芝浦工業大学 山岳会OB会	170	海外登山報告会の 運営資金として
㈱トヨタカスタマイジング &ディベロップメント	150	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
㈱京王プラザホテル	100	同上

「0年目」となる。結局のところ、営業開始はできなかったが、前任者の原田氏との引継ぎ、小屋のメンテナンスなど、すべきことは山積み。それを手探りで進めていった記録が印象的である。

続いて、「1年目」の章に入る。22年から営業できることが決まり、3年ぶりの小屋開けに向けて準備を進める様子、食事のメニューの検討(この年は、疲れた体にやさしいマッサマン・カレー)、営業期間中に使用する食材、資材などのヘリコプターを用いた荷上げの様子、そして、残念ながら最初の年の書入れ時に起きてしまったスタッフ

のコロナ感染による休業などの出来事や山の中の生活が語られる。「山のおトイレ事情」「オフシーズンのスタッフの過ごし方」など、なかなか表に出てこない山小屋の裏方の様子も垣間見ることできる。「2年目」の23年にもピンチがやって来る。台風2号の影響で、アクセスに使用する林道が崩落するというトラブルが発生。この先どうなるか分からないため、この年は食事なしの素泊まり営業に変更し、その分、小屋のメンテナンスに時間を充てたことなど、自然相手の思うように進まない現実がリアルに伝わる。そのようななかで、そのときにできる最善のことは何かを考えて、実行していく姿を読み取ることができる。

最後の「3年目」の章では、これまでの苦労を乗り越えて、より良いサービスを提供すること、さらには環境負荷の少ない山小屋運営ができるように考え、新しい試みがなされた様子が伝わってくる。

山に人が戻ってきて、小屋が定員オーバーになる状況が発生。それに対応すべく、宿泊費の安いプランとして雑魚寝のイワシプランや気軽にテント泊を楽しめるテント

のレンタルプランなど、従来の1泊2食付き以外のプランを提供し、様々なニーズに合わせたサービス提供を進めたことや、環境負荷を考えた食事のメニューの見直し(マッサマン・カレーから麓の食材を用いた和食へのシフトによる油污れの水の排出削減)、ウェルカム・ドリンクの提供、寝心地改善のためのベッドシーツの導入など、長時間山を歩いてきた登山者がほっとひと息入れられるような環境づくりを心がけていった姿が伝わってくる。

泊まり掛けの山行が、コロナ禍以前のように可能になってきた今、山小屋利用の新たな楽しみを見つけることができる一冊としてお勧めしたい。

(床田真理)

ジョナサン・フランクリン著／

井口耕二訳

A Wild Idea



2024年4月
山と溪谷社
210mm×148mm
462頁 2600+税

本書は「ザ・ノース・フェイイス」を創業したダグ・トンプキンスの人生を描いた一冊であり、「ザ・ノース・フェイイス」の創業者はなぜ会社を売って、パタゴニアに1000万エーカーの荒野を買ったのか? という長々とした副題が付けられている。

訳者は『イーロン・マスク』上・下や『ステイプジョブス』I・IIなどビジネス書の翻訳ではおなじみで、同氏訳の以前読んだ『新版社員をサーフィンに行かせよう』パタゴニア経営のすべてで、「パタゴニア」の経営哲学に感銘を受けたこともあり、「二匹目の泥鰌」を期待して読んでみることにした。がしかし、その期待は早々と裏切られてしまう。ダグは確かに「ザ・ノース・フェイイス」の創業者であり、1964年、21歳でクライミング用品を取り揃えた小さなお店をサンフランシスコにオープンし、のちに世界的なアウトドア用品会社へと発展する。だが、彼は67年に5万\$で「ザ・ノース・フェイイス」を売却し、本書においても同社が再び登場することはない。「体を動かすのが好きでこの道に

来たはずが、道具の話ばかりしな
ければならない。遠征だ、逃げる
んだ」それが売却の理由だった。

ダグはこの売却代金の半分を妻
の経営していた衣料品会社に投資
し、残りで冒険映画撮影のため、カ
リフォルニアから南米パタゴニア
への旅に出かける。このときの同
行者のひとりが、のちの「パタゴニ
ア」の創業者イヴォン・シュイナ
ードであり、ふたりは生涯、親友
であり続け、この旅が事業家とし
てのふたりの原点となる。

帰国後、ダグは妻とともにファ
ッション・ブランド「エスプリ」の
経営者としてアパレル業界で大成
功を収めるが、資本主義社会の頂
点を極めた後、自分が「間違った山
に登頂してしまった」と感じ始め
る。そして、同社の持ち分を全て
売却。森林保護の闘いに専念する
ため、49歳で人生を大転換するに
は、お金と自由な時間と企業社会
からの脱出が必要だったのだ。こ
うして3億\$ほどの資金を手にし
た彼の新たな人生が幕開けする。

サンフランシスコから脱出し、
パタゴニアの小さな山小屋で、美
しい自然とともに暮らし始める。
「自然を汚し、だれも必要としてな

い製品を作ってきた。これからは
地球に与えたダメージを回復して
いこう」、こうして大規模環境保護
への取り組みが始まる。

チリの大統領との駆け引きやダ
ム建設の反対活動、そして、日本
人には異論も挟みたくなるシーシ
ェパードへの支援、生態系再生と
再自然化への取り組みが綴られる。
結果、チリ、アルゼンチンのパタ
ゴニアから南米最南端のティエ
ラ・デル・フエゴまで、自らの寄
贈も含め2500万エーカーとい
う広大な土地を国立公園化させ、
南米大陸の生態系を破壊から守る
偉業が達成される。

ダグはパタゴニアの湖水でカヤ
ックが転覆遭難し亡くなることに
なったが、彼の波瀾万丈の人生、登
山家から起業家、そして環境活動
家として道を開いた生き様は、現
在のビジネス活動においても、我
々の登山活動においても、地球
環境に常に配慮しなければならな
いことを教えてくれる。

本書のタイトルとなっている
「Wild Idea」とは、突拍子もないア
イデア、考えという意味だ。まさ
にダグ・トンプキンスの生き方そ
のものであった。（木根康行）

会 務 報 告

令和7年度第7回(10月度)理事会

議事録

日時 令和7年10月9日(木) 19時

～ 21時30分

場所 集会所およびzoom(オ
ンライン)

【出席者】橋本会長、飯田・永田・

柏各副会長、原田・荒川各

常務理事、池田・吉田・大

塚・片山・武川各理事、石

川・額賀各監事、(オンライ

ン参加)梅田・根本各理事

【欠席者】猿渡常務理事、望月理事

【オブザーバー】節田会報編集人

長島事務局長(書記)

【審議事項】

1・支部行事への理事派遣(宮崎
ウェストン祭ほか)(柏)

支部からの要請を承認し、派遣
する理事を決めた。(賛成13、反対
0)

2・協賛団体制度について(大塚)

広報委員会から提案のあった協
賛団体制度(スポンサー企業の募
集について検討し、具体的に進め
ることに關して承認した。(賛成
13、反対0)

3・秩父宮記念山岳賞の受賞者の
承認(飯田)

審査委員会から提示された2名
の秩父宮記念山岳賞の受賞者につ
いて承認した。(賛成13、反対0)

【協議事項】

1・委員会連絡会議について(原
田)

10月15日実施の委員会連絡会議
の内容について検討した。

2・評議員懇談会について(原田)

11月19日実施の評議員懇談会の
内容について検討した。

3・団体会員の取り扱いについて
(永田)

一般の山岳会から団体会員とし
ての入会の問合せがあり、団体会

員について整理した。団体会員は学生の団体を原則とし、学生以外の団体会員の入会申込みがあった場合は、お断りすることにした。例外的に、自然保護団体や障がい者団体などの公益的な団体は理事会の承認をもって入会を認める。現在加入している団体会員は現状維持とする。

4・マナスル登頂70周年について
(柏)

2026年はマナスル登頂70周年、日本ネパール国交樹立70周年に当たり、外務省から記念行事への協力の打診があった。協力を前提に内容について検討を行なった。

5・支部と理事会との連携について(柏)

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)

正会員15名、準会員3名の入会承認の報告があった。

2・寄附金および助成金受入報告(片山)

寄附金1件の受入れ報告があった。

3・特別講演・創立120周年記念式典・年次(祝賀)晩餐会の来賓について(柏)

招待者の確認を行なった。

4・山研閉館日程の変更(10月14日に変更)(梅田)

5・海外登山助成募集開始について(柏)

令和7年度後期海外登山助成登山の募集が始まったとの報告があった。

6・JAMMINによるTシャツ販売企画(大塚)

団体に合わせたTシャツをデザイン・製作するチャリティー専門ブランドJAMMINとの事業について広報委員会より説明があった。

7・海外登山報告会(慶應大学)について(永田)

2026年3月に開催予定の海外登山報告会を慶應大学で開催するとの報告があった。

【その他】

「山」10月号の進捗状況について事務局連絡

ルーム日誌 9月

1日	総務委員会	山行クラブ
2日	常務理事会	YOUTH CLUB委員会
3日	国際交流PJ	入会説明会
6日	記念事業委員会	(山岳古道調査) 山遊会
7日	広報委員会	スケッチクラブ
8日	アルパインスキークラブ	かつばの会
9日	理事会	
10日	図書委員会	東京支部(初級者講習会)
15日	東京支部	委員会連絡会議
16日	科学委員会	学生部
17日	総務委員会	クニ塾
18日	アルピニズムクラブ	緑爽会講演会
20日	同好会連絡会議	
21日	総務委員会	沢登り同好会
22日	子どもと登山委員会	
23日	記念事業委員会	(グレート・ヒマラヤ・トラバース)
24日	学生部	みちのり山の会
27日	記念事業委員会	緑爽会
28日	記念事業委員会	(引き継が)

30日 東京支部 総務委員会 ア
ルピニズムクラブ
10月来室者 322名

会員異動

物故

佐藤 勉(6596) 25・10・24
西 孝子(8325) 25・10・14
桐山裕子(13344) 25・9・12
大塚忠彦(13559) 25・8・22
瀬沼 聡(16956) 25・10・19
退会

柳 明雄(7089) 茨城
萱島 孝(8828) 東九州
大庭貞江(12515)
後藤克裕(16581) 岩手
徳山圭一郎(17178) 広島
齋藤哲也(17198) 埼玉
大島民橋(A0619) 静岡



神長幹雄	登山家・冒険家になるには/なるにはBOOKS No.4	176p/19cm	ぺりかん社	2025	出版社寄贈
山と溪谷社 編	絶景低山コースガイド:関東周辺	144p/21cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
北村節子	ビッケルと口紅:地球あちこち登った笑った考えた/ヤマイ文庫	336p/15cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
中島慶二 監修/益子知樹 監修/山と溪谷社 いきもの部 編	改訂版 いきもの六法:日本の自然を楽しみ、守るための法律	128p/21cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
羽根田治	あなたはもう遭難している:本当にあったびっくり遭難に学ぶ登山の超基本	144p/19cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
中村浩志	蘇れ!神の鳥ライチョウ	288p/19cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
日本山岳会東海支部 編/沖允人 編集代表	インド・ヒマラヤ:Indian Himalaya 再改訂・増補版 (2025年)	734p/22cm	日本山岳会東海支部	2025	発行者寄贈
Tokai Section of The Japanese Alpine Club	Indian Himalaya:An Illustrated Guide for Mountaineers	423p/26cm	Tokai Section of Jap	2025	発行者寄贈
佐藤れい子	絶景・世界の山歩き:写真とエッセーで楽しむ	252p/21cm	新潟日報事業社	2022	著者寄贈
乗田眞紀子	句集 姫沙参	241p/20cm	文學の森	2025	著者寄贈
遠山若枝	花便り	83p/26cm	遠山若枝	2020	著者寄贈
佐藤昌明	なぜ白神に登れないのか?:ルポ・秋田入山禁止問題	190p/19cm	無明舎出版	2025	著者寄贈
深田久弥追悼委員会	深田久弥の追憶 復刻版	187p/21cm	深田久弥追悼委員会	2003	荒井正人氏寄贈
深田勝弥 編/高田宏 監修	深田久弥の思い出	125p/21cm	深田久弥山の文化館	2003	大森久雄氏寄贈
朝比奈菊雄さんを偲ぶ会	朝比奈菊雄さんを偲ぶ 追悼集	47p/21cm	朝比奈菊雄さんを偲ぶ会	2005	大森久雄氏寄贈
増田俊雄	トコトおじさん山歩き	272p/21cm	栃木リビング新聞社	2025	著者寄贈
いちのへ義孝	風薫る森 鳥いちのへ義孝写真集	120p/21cm	東奥日報社	2010	著者寄贈
いちのへ義孝	八甲田山 四季と花いちのへ義孝写真集	120p/21cm	東奥日報社	2009	著者寄贈
一戸義孝	八甲田山:一戸義孝写真集	104p/19cm	栃の葉書房	1994	著者寄贈
牧田肇 監修/一戸義孝 写真	八甲田・十和田	179p/31cm	青森銀行	1996	著者寄贈
東京白稜会 編	恩田善雄の甲斐駒ヶ岳を伝える:東京白稜会創立八十周年記念	262p/30cm	東京白稜会	2025	発行者寄贈
井之上巧磨 編	First Ascent:2024日本山岳会学生部ブンギ遠征隊報告書	90p/30cm	日本山岳会学生部ブンギ遠征隊	2025	発行者寄贈
tamaco	七ツ石小屋よもやま話	44p/30cm	七ツ石小屋出版	2025	発行者寄贈
石間信夫	安倍川流域の山と谷:大井川・富士川流域/マウンテンガイドブックシリーズ No.23	136p/19cm	朋文堂	1958	2024年度図書交換会出品本
福田夢江	黒部の何処に/自然と人間シリーズ No.7	336p/19cm	スキージャーナル	1977	2024年度図書交換会出品本
大島亮吉	山:随想	323p/20cm	朋文堂新社	1930	平澤瑛嗣氏親族寄贈
冠松次郎	破片岩:随想・紀行	300p/20cm	耕進社	1933	平澤瑛嗣氏親族寄贈
中村謙	山と丘陵	358p/20cm	朋文堂	1939	平澤瑛嗣氏親族寄贈
田部重治	青葉の旅 落葉の旅	301p/19cm	第一書房	1941	平澤瑛嗣氏親族寄贈
逗子八郎	山征かば	386p/19cm	中央公論社	1942	平澤瑛嗣氏親族寄贈
大塚彌之助	山はどうして出来たか:地球の生ひたち	276+12p/19cm	岩波書店	1942	平澤瑛嗣氏親族寄贈
串田孫一	若き日の山/河出新書 No.69	174p/18cm	河出書房	1955	平澤瑛嗣氏親族寄贈
中西悟堂	山と鳥/コマクサ叢書 No.6	281p/19cm	朋文堂	1957	平澤瑛嗣氏親族寄贈
今村貞雄/内田清之助/今官一	白い山脈:日本アルプス登山記録	148p/27cm	平凡出版	1957	平澤瑛嗣氏親族寄贈
立山敏雄/加藤数功	九州の山	190p/19cm	しんつくし山岳会	1958	平澤瑛嗣氏親族寄贈
生沢朗	氷壁画集	288p/19×24cm	朋文堂出版	1958	平澤瑛嗣氏親族寄贈
日高信六郎 編	朝の山 残照の山	349p/22cm	二見書房	1969	平澤瑛嗣氏親族寄贈
羽賀正太郎 編	奥秩父大菩薩連嶺/アルペンガイド No.15	174p/18cm	山と溪谷社	1971	平澤瑛嗣氏親族寄贈
山本脩	旅についての思索/講談社学術文庫 No.67	192p/15cm	講談社	1976	平澤瑛嗣氏親族寄贈
大竹庄次郎 編	銀山平探検記(復刻版)/湖底幻影 No.1	147p/30cm	ベースボール・マガジン社	1990	平澤瑛嗣氏親族寄贈
小島六郎 監修	銀山平をとりまく山々/湖底幻影 No.3	214p/30cm	ベースボール・マガジン社	1990	平澤瑛嗣氏親族寄贈
早稲田大学山岳部 編	春山合宿遭難報告書(1993年度):剣岳別山尾根	72p/30cm	早稲田大学山岳部	1995	平澤瑛嗣氏親族寄贈 他41冊
Cockrell, Will	Everest, Inc.:The Renegades and Rogues who Built an industry at the T	333p/25cm	Gallery Books	2024	購入
McDonald, Bernadette	Alpine Rising	272p/24cm	Mountaineers Books	2024	購入
Moorehead, Catherine	Mountain Guru:The life of Doug Scott	344p/25cm	Birlinn	2024	購入

図書受入報告(2025年9月～10月)

著 者	書 名	頁／サイズ	発 行 者	発行年 寄贈／購入別
金川英雄	高尾山の社会史	264p／21cm	青弓社	2025 出版社寄贈
田部井淳子	人生、山あり“時々”谷あり/潮文庫	176p／15cm	潮出版社	2025 出版社寄贈

◆編集後記◆

●久しぶりに北ハケ岳を歩いてきました。山口耀久さんの『北ハツ彷徨』の1シーンを彷彿させる静謐な森を下っていたときのこと、「木の枝に下がっている、あのトロロ昆布のようなものは何？」との声。「サルオガセだよ」と答えたところ、「どんな意味？」と二の矢が……。そういえば、その意味を考えたことはありませんでした。

●サルオガセは、漢字で表わすと「猿尾栂」あるいは「猿尾柳」で、栂も柳も「手かせ足かせ」の「かせ」のこと。サガリオコケ(下緒苔)からの転化という説もあるそうです。また、「霧藻」という優雅な別名もあります。奥秩父に秩父宮雍仁親王が命名された霧藻ヶ峰があることを思い出しました。いくつになっても勉強ですね。(節田重節)

日本山岳会会報 山 966 号

2025年(令和7年)11月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
 編集人 節田重節
 E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社